

# 子どもの社会生活の自立測定尺度の開発 － 家庭訪問支援における支援者評価と保護者評価 －

キーワード：家庭訪問，不登校，社会生活の自立

○地域ケア経営マネジメント研究所 高橋 順一 (008413)  
千賀 則史 (同朋大学・009143) 山脇 望美 (名古屋大学大学院・009670)  
野口 啓示 (福山市立大学・002736) 伊藤 嘉余子 (大阪府立大学・003930)

# 1. 研究目的

不登校，ひきこもり，非行，ハラスメント，社会的養護，発達障害，愛着障害などの困難ケースに共通しているのは，相談意欲や動機づけに乏しく，面接室で待っていても相談に来ない，来られないということである

そのため，支援を求めない・求められないケースに対して必要な支援を届けるために直接会いに行く  
家庭訪問などの支援が求められている

こうした支援においては，短期から長期的な評価を通して効果的な支援を明らかにしていくことが不可欠であり，そのためには，不登校やひきこもり等の程度，障がい，パーソナリティ，家族関係，さらには日常生活自立や社会生活自立など  
**多面的な評価指標**の設定が重要となる

内閣府 (2019) 『令和元年版子供・若者白書』<https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/index.html>

内閣府 (2018) 『平成30年版子供・若者白書』<https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h30honpen/index.html>

厚生労働省 (2010) 『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』

内閣府 (2011) 『ひきこもり支援者読本』

山本 泰 (2007) 『不登校状態に有効な教師による支援方法』『教育心理学研究』55(1), 60-71.

境泉洋・中村光・植田健太・坂野雄二 (2007) 『ひきこもり状態にある人の問題行動が活動範囲に与える影響』『心身医学』47(10), 865-873.

Nonaka, S., Shimada, H., & Sakai, M. (2018). Assessing adaptive behaviors of individuals with hikikomori (prolonged social withdrawal): development and psychometric evaluation of the parent-report scale. *International Journal of Culture and Mental Health*, 11(3), 280-294. 2

Nonaka, S., Shimada, H., & Sakai, M. (2020). Family behavioral repertoires and family interaction influence the adaptive behaviors of individuals with hikikomori. *Frontiers in psychiatry*, 10, 977.

野中俊介・大野あき子・境泉洋 (2012) 『行動論的観点からみたひきこもり状態と家族機能の関連』『行動療法研究』38(1), 1-10.

# プログラム評価等における家庭訪問支援のアウトカム指標の候補

- ・メンタルヘルスに関するスクリーニング尺度SDQ (Goodman 1997)
- ・子どものQOL尺度 (Bullinger et al. 1994) ・Well-being尺度 (畠中ら 2006)
- ・不登校状態尺度 (山本 2007)
- ・登校日数 ・学習到達度 ・1項目の生活満足度 (OECD 2015 ; 2018)
- ・社会的スキル尺度 (菊池 1988 ; 2007 ; 嶋田ら 1996 ; 磯部ら 2006)
- ・ひきこもり行動チェックリスト (HBCL) (境ら 2004)
- ・Adaptive Behaviors Scale for Hikikomori (Nonaka et al. 2018)
- ・ひきこもり関係機能尺度(HRFS) (野中ら 2012) など

ただし、不登校やひきこもりなどの困難を抱える子どもの社会生活の自立における細やかな変化を捉え、且つ支援の際に簡易に用いることができる指標は少ない

さらに、効果測定や時系列分析、正確な予測に必須である概念的・数量的一次元性を備えた尺度となると開発することが求められる

OECD (2019) PISA 2018 Results (Volume III): What School Life Means for Students' Lives, PISA, OECD Publishing, Paris. (<https://doi.org/10.1787/acd78851-en>.)

OECD (2017) PISA 2015 Results (Volume III): Students' Well-Being, PISA, OECD Publishing, Paris. (<http://dx.doi.org/10.1787/9789264273856-en>)

Bullinger, M., Mackensen, S., and Kirchberger, I. (1994) KINDL - ein Fragebogen zur gesundheitsbezogenen Lebensqualität von Kindern. Zeitschrift für Gesundheitspsychologie 2, 64-67.

Rossi, Peter H., Lipsey, Mark W., and Freeman, Howard E. (2004) Evaluation: A Systematic Approach, Seventh Edition, Sage. (=2005, 大島 巖・平岡公一・森 俊夫・元永拓郎監訳『プログラム評価の理論と方法：システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド』日本評論社.)

Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: a research note. Journal of child psychology and psychiatry, 38(5), 581-586.

菊池肇夫 (1988)『思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル』川島書店。 菊池肇夫 編著 (2007)『社会的スキルを測る：KSS-18/ハンドブック』川島書店。

畠中宗一・木村直子 (2006)『子どものウェルビーイングと家族』世界思想社。 山本崇 (2007)『不登校状態に有効な教師による支援方法』『教育心理学研究』55(1), 60-71。

嶋田洋徳・戸崎啓子・岡安孝弘・坂野雄二 (1996)『児童の社会的スキル獲得による心理的ストレス軽減効果』『行動療法研究』22(2), 9-20。 磯部美良・佐藤正二・佐藤容子・岡安孝弘 (2006)『児童用社会的スキル尺度教師評定版の作成(資料)』『行動療法研究』32(2), 105-115。

境泉洋・石川信一・佐藤英 (2004)『ひきこもり行動チェックリスト(HBCL)の開発および信頼性と妥当性の検討』『カンパニオニクス』57(3), 210-220。 中村光・若永可奈子・境泉洋・下津咲絵・井上教子ほか(2006)『ひきこもり状態にある人を持つ家族の受療行動の実態』『こころの健康』21(2), 26-34。

境泉洋・中村光・嶋田洋徳 (2007)『ひきこもり状態にある人の問題行動が行動機能に与える影響』『心身医学』17(10), 865-873。

Nonaka, S., Shimada, H., & Sakai, M. (2018). Assessing adaptive behaviors of individuals with hikikomori (prolonged social withdrawal): development and psychometric evaluation of the parent-report scale. International Journal of Culture and Mental Health, 11(3), 280-294.

Nonaka, S., Shimada, H., & Sakai, M. (2020). Family behavioral repertoires and family interaction influence the adaptive behaviors of individuals with hikikomori. Frontiers in psychiatry, 10, 977.

野中俊介・大野あき子・境泉洋(2012)『行動論的観点からみたひきこもり状態と家族機能の関連』『行動療法研究』38(1), 1-10。

# 研究目的

そこで本研究は

**エビデンスに基づく効果的な家庭訪問支援に関する  
知見を得ることをねらいに**

**不登校やひきこもりなどの困難を抱える  
子どもの社会生活の自立を  
実践の中で測定できる尺度の開発**

を目的とした

## 2. 研究の視点および方法

### 調査対象

A県における不登校やひきこもりなどの困難を抱える小学生から高校生139名に家庭訪問支援を行った支援者および支援を受けた子どもの保護者

### 調査期間

2018年12月5日から12月31日（約1か月間）

## 3. 倫理的配慮

名古屋大学大学院教育発達科学研究科倫理審査会の承認を得て実施した（承認番号18-1246）。  
具体的には、匿名化した上でのデータ処理、調査結果の公表の際に個人が特定されない配慮などを行った。

# 調査内容

## 基本属性 (匿名化されたデータベース)

子どもの年齢, 性別, 家族構成, 障がい者手帳の有無など

## 子どもの社会生活の自立測定尺度 (支援者・保護者への無記名自記式の調査)

支援者と研究者による議論を重ね, 細かい変化を測定できる一因子を想定した11項目の尺度を作成し, 支援者評価と保護者評価の項目を統一し用いた (回答は4件法)

# 統計解析

- 支援者・保護者評価の両データにおける尺度の構成概念妥当性を構造方程式モデリングによる確認的因子分析で検討した
- 冗長性の高い項目を除くため, 多分相関係数が0.7以上のペアのうち一方を除外する手法を採用した
- モデルのデータへの適合度は, CFIとRMSEAで判定し, パラメータの推定にはWLSMVを用いた
- 統計ソフトは, SPSS 24とMplus 7.3を使用した
- 統計解析には, 回収されたデータのうち, 分析に必要な全ての変数に欠損値を有さないデータを使用した (支援者137データ, 保護者73データ)

# 4. 研究結果

## 基本属性の分布 (n=137)

| 子どもの年齢                 |                    |              |
|------------------------|--------------------|--------------|
| 平均15.3歳、SD1.90、範囲10-19 |                    |              |
| 性別                     | 男児                 | 89 ( 65.0 )  |
|                        | 女児                 | 48 ( 35.0 )  |
|                        | その他                | 0 ( 0.0 )    |
| 就学・就労状況                | 中学生                | 62 ( 45.3 )  |
|                        | 高校生                | 40 ( 29.2 )  |
|                        | アルバイト              | 0 ( 0.0 )    |
|                        | 無職                 | 27 ( 19.7 )  |
|                        | その他                | 8 ( 5.8 )    |
| 家族構成                   | ひとり親と子どもの世帯        | 80 ( 58.4 )  |
|                        | 夫婦と子どもの世帯          | 42 ( 30.7 )  |
|                        | 祖父との三世帯世帯          | 0 ( 0.0 )    |
|                        | 祖母との三世帯世帯          | 2 ( 1.5 )    |
|                        | 祖父母との三世帯世帯         | 6 ( 4.4 )    |
|                        | その他の世帯             | 7 ( 5.1 )    |
| 障がいに関する手帳など            |                    |              |
| 身体障がい                  | 手帳を持っていない          | 134 ( 97.8 ) |
|                        | 手帳を持っている           | 1 ( 0.7 )    |
|                        | わからない              | 2 ( 1.5 )    |
|                        | 申請中                | 0 ( 0.0 )    |
| 知的障がい                  | 手帳を持っていない          | 130 ( 94.9 ) |
|                        | 手帳を持っている           | 4 ( 2.9 )    |
|                        | わからない              | 3 ( 2.2 )    |
|                        | 申請中                | 0 ( 0.0 )    |
| 精神障がい                  | 手帳を持っていない          | 122 ( 89.1 ) |
|                        | 手帳を持っている           | 8 ( 5.8 )    |
|                        | わからない              | 7 ( 5.1 )    |
|                        | 申請中                | 0 ( 0.0 )    |
| 発達障がい                  | 診断はない              | 102 ( 74.5 ) |
|                        | 診断がある              | 25 ( 18.2 )  |
|                        | わからない              | 10 ( 7.3 )   |
|                        | 検査中                | 0 ( 0.0 )    |
| いじめを受けた経験              | いじめを受けたことはない       | 82 ( 59.9 )  |
|                        | 軽度のいじめを受けたことがある    | 51 ( 37.2 )  |
|                        | 中度・重度のいじめを受けたことがある | 4 ( 2.9 )    |
| 不登校・ひきこもり              | 不登校・ひきこもりをしたことはない  | 38 ( 27.7 )  |
|                        | 不登校・ひきこもり歴がある      | 37 ( 27.0 )  |
|                        | 現在、不登校・ひきこもりがある    | 62 ( 45.3 )  |

名 (%)

## 支援者評価による子どもの社会生活の自立に関する項目の回答分布 (n=137)

| 質問項目                 | 回答カテゴリ      |             |             |             |
|----------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|                      | 全くあてはまらない   | あまりあてはまらない  | ややあてはまる     | よくあてはまる     |
| 1. 身だしなみなどが整っている     | 14 ( 10.2 ) | 31 ( 22.6 ) | 69 ( 50.4 ) | 23 ( 16.8 ) |
| 2. 整理整頓ができている        | 33 ( 24.1 ) | 34 ( 24.8 ) | 53 ( 38.7 ) | 17 ( 12.4 ) |
| 3. 笑顔などの表情が豊かである     | 18 ( 13.1 ) | 42 ( 30.7 ) | 44 ( 32.1 ) | 33 ( 24.1 ) |
| 4. 積極的に会話する          | 25 ( 18.2 ) | 39 ( 28.5 ) | 32 ( 23.4 ) | 41 ( 29.9 ) |
| 5. 情緒的に安定している        | 20 ( 14.6 ) | 45 ( 32.8 ) | 57 ( 41.6 ) | 15 ( 10.9 ) |
| 6. 外出することができる        | 16 ( 11.7 ) | 17 ( 12.4 ) | 35 ( 25.5 ) | 69 ( 50.4 ) |
| 7. 人の集まりに参加することができる  | 23 ( 16.8 ) | 35 ( 25.5 ) | 37 ( 27.0 ) | 42 ( 30.7 ) |
| 8. 規則正しい生活を送っている     | 44 ( 32.1 ) | 26 ( 19.0 ) | 43 ( 31.4 ) | 24 ( 17.5 ) |
| 9. 目標達成に向けてがんばっている   | 31 ( 22.6 ) | 40 ( 29.2 ) | 45 ( 32.8 ) | 21 ( 15.3 ) |
| 10. 困った時に、自分でSOSを出せる | 30 ( 21.9 ) | 78 ( 56.9 ) | 26 ( 19.0 ) | 3 ( 2.2 )   |
| 11. 家族に悩みを相談することができる | 48 ( 35.0 ) | 56 ( 40.9 ) | 30 ( 21.9 ) | 3 ( 2.2 )   |

名 (%)

## 保護者評価による子どもの社会生活の自立に関する項目の回答分布 (n=73)

| 質問項目                 | 回答カテゴリ      |             |             |             |
|----------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|                      | 全くあてはまらない   | あまりあてはまらない  | ややあてはまる     | よくあてはまる     |
| 1. 身だしなみなどが整っている     | 6 ( 8.2 )   | 22 ( 30.1 ) | 32 ( 43.8 ) | 13 ( 17.8 ) |
| 2. 整理整頓ができている        | 25 ( 34.7 ) | 22 ( 30.6 ) | 16 ( 22.2 ) | 9 ( 12.5 )  |
| 3. 笑顔などの表情が豊かである     | 4 ( 5.5 )   | 19 ( 26.0 ) | 26 ( 35.6 ) | 24 ( 32.9 ) |
| 4. 積極的に会話する          | 5 ( 6.8 )   | 23 ( 31.5 ) | 27 ( 37.0 ) | 18 ( 24.7 ) |
| 5. 情緒的に安定している        | 6 ( 8.2 )   | 25 ( 34.2 ) | 35 ( 47.9 ) | 7 ( 9.6 )   |
| 6. 外出することができる        | 7 ( 9.6 )   | 9 ( 12.3 )  | 25 ( 34.2 ) | 32 ( 43.8 ) |
| 7. 人の集まりに参加することができる  | 18 ( 25.0 ) | 18 ( 25.0 ) | 19 ( 26.4 ) | 17 ( 23.6 ) |
| 8. 規則正しい生活を送っている     | 25 ( 34.2 ) | 21 ( 28.8 ) | 21 ( 28.8 ) | 6 ( 8.2 )   |
| 9. 目標達成に向けてがんばっている   | 17 ( 23.3 ) | 27 ( 37.0 ) | 16 ( 21.9 ) | 13 ( 17.8 ) |
| 10. 困った時に、自分でSOSを出せる | 9 ( 12.3 )  | 18 ( 24.7 ) | 40 ( 54.8 ) | 6 ( 8.2 )   |
| 11. 家族に悩みを相談することができる | 16 ( 21.9 ) | 16 ( 21.9 ) | 31 ( 42.5 ) | 10 ( 13.7 ) |

名 (%) 項目2、7は欠損値のため合計72名となる

# 子どもの社会生活の自立測定尺度の 構成概念妥当性の検討

11項目の子どもの社会生活の自立測定尺度（支援者評価）の因子構造の側面からみた構成概念妥当性を確認的因子分析で検討したところ、一因子モデルのデータに対する適合度は、CFIが0.878、RMSEAが0.238とCFIが低くRMSEAが高かった



そのため、多分相関係数が0.7以上のペアのうち一方ずつを除外した（項目2、4、7、11を除外）

|                       | x1    | x2    | x3    | x4    | x5    | x6    | x7    | x8    | x9    | x10   |
|-----------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| x1. 身だしなみなどが整っている     |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
| x2. 整理整頓ができている        | 0.757 |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
| x3. 笑顔などの表情が豊かである     | 0.499 | 0.201 |       |       |       |       |       |       |       |       |
| x4. 積極的に会話する          | 0.419 | 0.170 | 0.886 |       |       |       |       |       |       |       |
| x5. 情緒的に安定している        | 0.447 | 0.437 | 0.415 | 0.333 |       |       |       |       |       |       |
| x6. 外出することができる        | 0.368 | 0.252 | 0.523 | 0.543 | 0.450 |       |       |       |       |       |
| x7. 人の集まりに参加することができる  | 0.480 | 0.235 | 0.603 | 0.582 | 0.354 | 0.935 |       |       |       |       |
| x8. 規則正しい生活を送っている     | 0.649 | 0.674 | 0.376 | 0.312 | 0.513 | 0.582 | 0.601 |       |       |       |
| x9. 目標達成に向けてがんばっている   | 0.641 | 0.591 | 0.498 | 0.500 | 0.442 | 0.664 | 0.648 | 0.722 |       |       |
| x10. 困った時に、自分でSOSを出せる | 0.350 | 0.272 | 0.649 | 0.605 | 0.434 | 0.471 | 0.432 | 0.455 | 0.596 |       |
| x11. 家族に悩みを相談することができる | 0.311 | 0.336 | 0.467 | 0.383 | 0.299 | 0.246 | 0.185 | 0.414 | 0.404 | 0.758 |



# 子どもの社会生活の自立測定尺度 の構成概念妥当性の検討

## 支援者評価

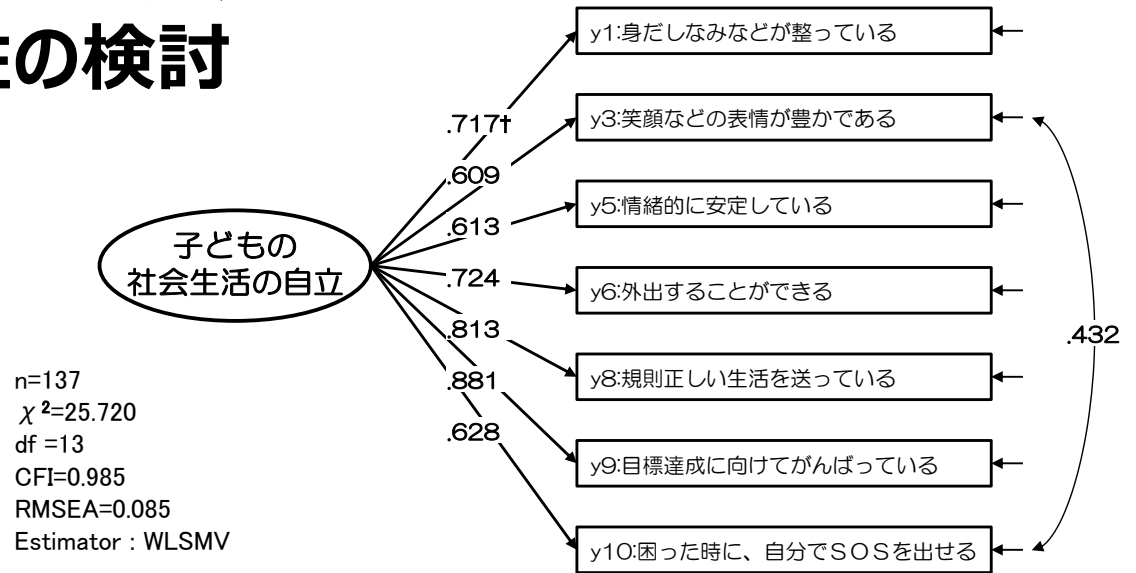


図1 「子どもの社会生活の自立測定尺度」の構成概念妥当性(支援者評価)

## 保護者評価

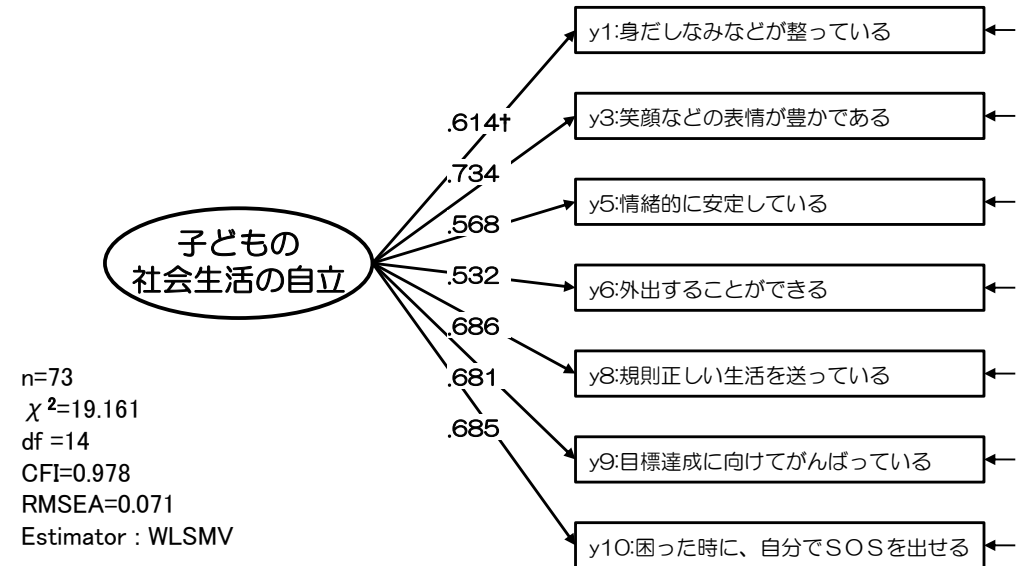


図2 「子どもの社会生活の自立測定尺度」の構成概念妥当性(保護者評価)

## 5. 考察

支援者と研究者による議論を重ね、  
不登校やひきこもりなどの困難を抱える子どもの細やかな変化を捉え、  
且つ支援の際に簡易に用いることができる尺度を作成した

支援者・保護者評価の両データにおける7項目版の  
「子どもの社会生活の自立測定尺度」の構成概念妥当性は許容水準にあり、  
概念的・数量的一次元性を備えた尺度が開発できた

支援者・保護者評価で同じ概念を測定できることは補完等の意味で有益で  
効果測定や時系列分析、正確な予測、基本属性による違いなどを  
ふまえた効果的な支援方法の検討に活用できると推察される

### 今後の課題

構造方程式モデリングを用いた演繹的な検討であることを考慮しても  
データ数の少なさは否めず、大きなデータでの再検討が課題である。  
既存尺度や基本属性等との関連性の検討や評価、予測、有効な支援の  
検討を通し、実践に資する知見を明らかにすることが肝心である